

宇宙人とのコミュニケーションは成り立つか？

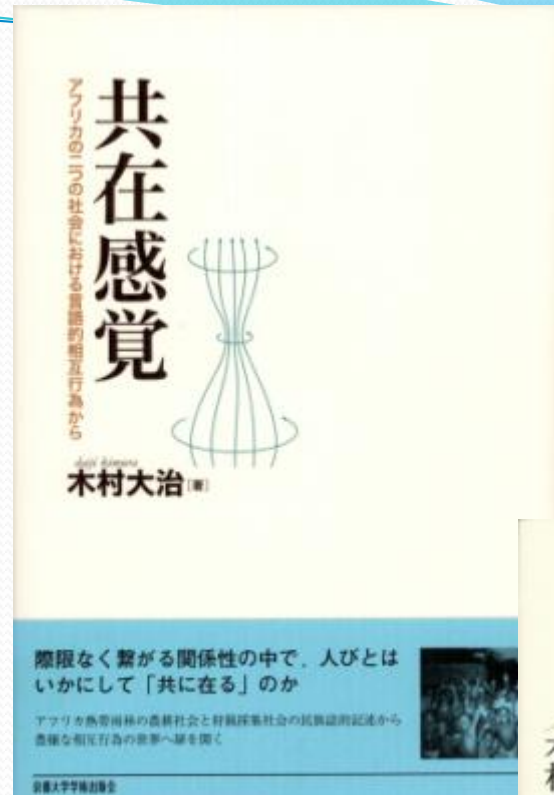
木村大治
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

自己紹介

- 京都大学理学部出身
- 大学院では人類進化論研究室に所属，アフリカ・ザイール(現・コンゴ民主共和国)の調査で博士号
- 「インタラクション・スクール」
- 『コミュニケーションの自然誌』1997「情報・規則性・コミュニケーション – シヤノンとベイトソンの対比を手がかりに –」

自己紹介

- 『共在感覚』2003



『括弧の意味論』2011



発表の構成

- なぜ宇宙人を考えるのか?
- ファースト・コンタクト・テーマ
- 現実に見ることのできる他者たち
 - 異文化
 - 他種
 - ロボット
- 「出会い」の特異性と双対図式
- 特異点を消す方法
 - 宇宙に共通の何かを参照する
 - 挨拶: インタラクションを構造化する
- 「信頼」について

宇宙人とのコミュニケーション は成り立つか？

→「そんなもんわかるわけないやろ」

しかし...

「出会ってない」が「コミュニケーションできるかもしれない
(宇宙人)」について議論することには意味がある

知性intelligenceとは何か？

ウィトゲンシュタインの「火星人」

(b) 私が或る像を見る。その像は、杖にすぎりながら急な坂道を登って行く老人を、表わしている。——しからば、如何にしてその像は、そのような事を、表わしているのか？ もし彼がその姿勢でその坂道を下へ滑っているとしても、やはりその像のように見え得るのではないのか？ もしかして火星人はその像を、その老人はその姿勢でその坂道を下へ滑っているのだ、として記述するかもしれないのではないか。しかし私は、何故我々はその像を火星人のように記述しないのかについて、説明する必要が無い。

140. しかしそうすると、私の間違い——即ち、私は「その像は私にその像の或る一定の使用を強制する」と信じていた、とも表現され得るかもしれないその間違い——は、どういうものであったのか？ 一体、如何にして私

- 「哲学探究」より

ベイトソンの「火星人」

- 「精神と自然」より

第6回宇宙総合学研究ユニットシンポジウム

美術学生に対してはもっと直接的な行動に出た。クラスは十人か十五人ほどの小さなもので、敵意からくる白けた雰囲気漂わせていることくらいは、教室に入る前から察しがついていた。実際ドアを開けると、こちらが悪魔の生まれ変わりで、原子力兵器や殺虫剤を常識として推進しようとするような人間だと思われているのが明白だった。当時は（あるいは今日でもそうだろうか？）科学は「価値」とか「感情」とかいうものとはまったく無縁のものと見られていたのである。

こちら準備は整っていた。用意してきた二つの紙袋の一つをあけると、私はゆでたてのカニを机の上に置き、彼らに向かってこんな挑戦的な問いを発したのである。——「この物体が生物の死骸であるというのを、私に納得のいくように説明してみなさい。そう、自分、**火星人**だと想定してみるのもいいだろう。生物とは火星で日常的に接しているし、君たち自身も生物である。しかし勿論カニもエビも見ただけではない。そこにこんな物体がいくつか流れ星になって降ってきたとする。そのほとんどは完全な姿をとどめてはいないが、観察の結果、これは生物の死骸であるという結論に至るとする。さあ、どうやってその結論に至るのか？」

大庭健と「最悪の接触」

- 筒井の『最悪の接触(ワースト・コンタクト)』が『他者とは誰のことか』において引用されている
- マグ・マグ人のケララと試験的に一週間の共同生活させられることになった地球人の「おれ」は、相手を理解したと思った刹那に裏切られるという不条理な体験を繰り返し、ノイローゼに陥る
- コミュニケーションの成立そのものに関する議論

心の哲学におけるSF的想定

- 逆転クオリア

自分と他者が同じリンゴを見ていても、自分には赤く見えるが他者には青く見えている可能性があると考ええる。

- 哲学的ゾンビ

物理的反応としては、普通の人間と全く同じであるが、意識(クオリア)を全く持っていない人間。

cf. 「ブレードランナー」

なぜ極限状態を見るのか

- 極限状態ではじめて、そのものの本性が現れることがある
- 物理学において:
 - 高エネルギー物理学で素粒子の性質が明らかになる
 - 極低温で、超電導や超流動といった、マクロな形で量子力学的現象が現れる
- コミュニケーションも、「日常性」のベールを引きはがすには、極端な状態 – 究極の他者 – を考えるのが有効
- 宇宙人がコミュニケーションの哲学に登場するのは当然

「想像できないことを想像する」

- 山田正紀: SFの可能性は「想像できないことを想像する」ことである
- 『神狩り』1975「神」が書いたと思われる文書の中に現れる記号論理の体系が、人類のそれと違っていた、というとんでもない話

「ファースト・コンタクト」とは

- マレイ・ラインスターの”First Contact” 1945(邦題『最初の接触』)
カニ星雲における地球人と異星人の宇宙船同士の出会いを描いた
- この作品を契機として、この種のSF作品は「ファースト・コンタクト・テーマ」と呼ばれるようになった
- しかしもともとは文化人類学の用語だという話もある

「ファースト・コンタクト」執筆へ

- 『ファースト・コンタクト – 出会いの相互行為論 – (仮題)』
NTT出版から今年中に？ 出版予定

他者たち(現実に見ることのできる)

- 異文化
- 他種
- ロボット

異文化

- アーシュラ・K・ル＝グウィン『ゲド戦記』『闇の左手』文化人類学者クローバーを父に持つ
- 上橋菜穂子『精霊の守り人』オーストラリア・アボリジン研究者
- オースン・スコット・カード『死者の代弁者』『異星人人類学』
- 私自身の調査経験

他種

- 霊長類(チンパンジー, ニホンザル, ...)
- 「共感メソッド」?
- 昆虫: カマキリの不気味さは?
- 身体的相同性とコミュニケーション?

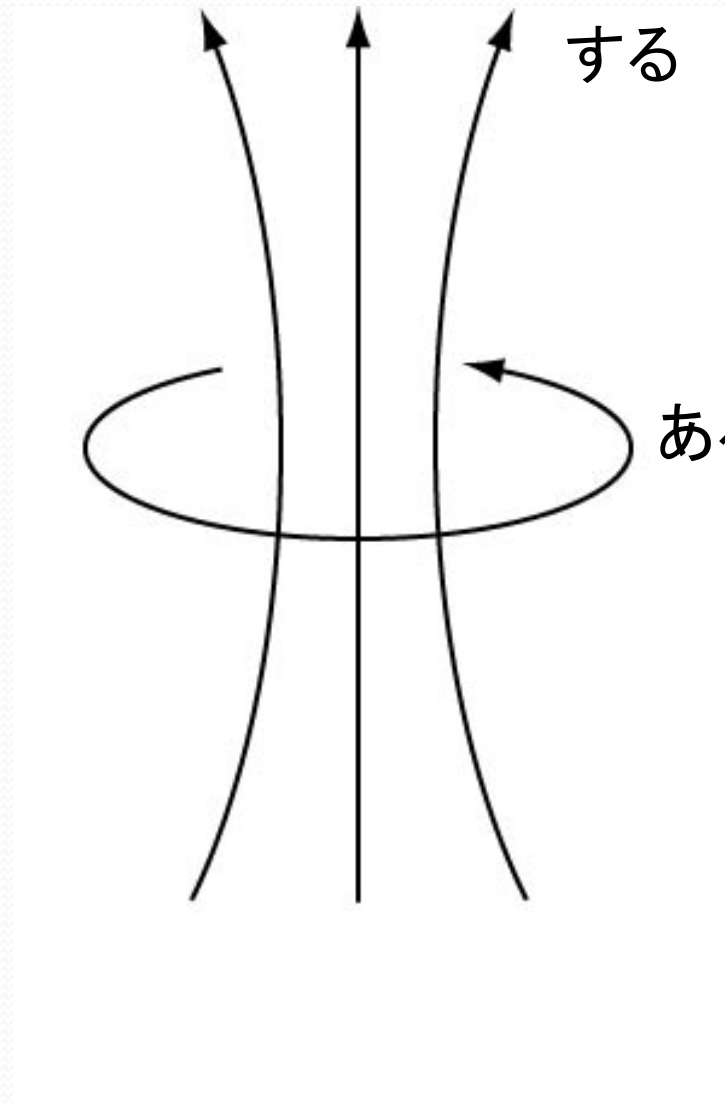
ロボット

- ヒューマノイドロボット, AI
- AIの哲学
- 「イライザ問題」: 相手への合理性や理解の投射
- 「機械同士ではわかり合っているが, 人間にはわからない」状況? cf. 神林長平『戦闘妖精・雪風』

「出会い」

- 「出会いの時の 君のようです ためらいがちに かけた言葉に 驚いたように 振り向く君に」(小椋佳『シクラメンのかほり』)
- 「婚活」「出会い系」

双対図式



共在感覚

- Sense of Co-presence
- たとえ争いあう関係であっても、お互いに「あいつはそういうやつなのだ」という納得があってそれをやっているのなら、そこには一種の「共在感覚」が存在する
- 「共在」は「共存」よりも中立的で広い概念

双対図式の滑らかさ

- 「ある」の次元: 共在しているそのやり方の規則性や美しさ
- 「する」の次元: 行為の一貫性
- 「昨日またかくてありけり 今日もまたかくてありなむ」

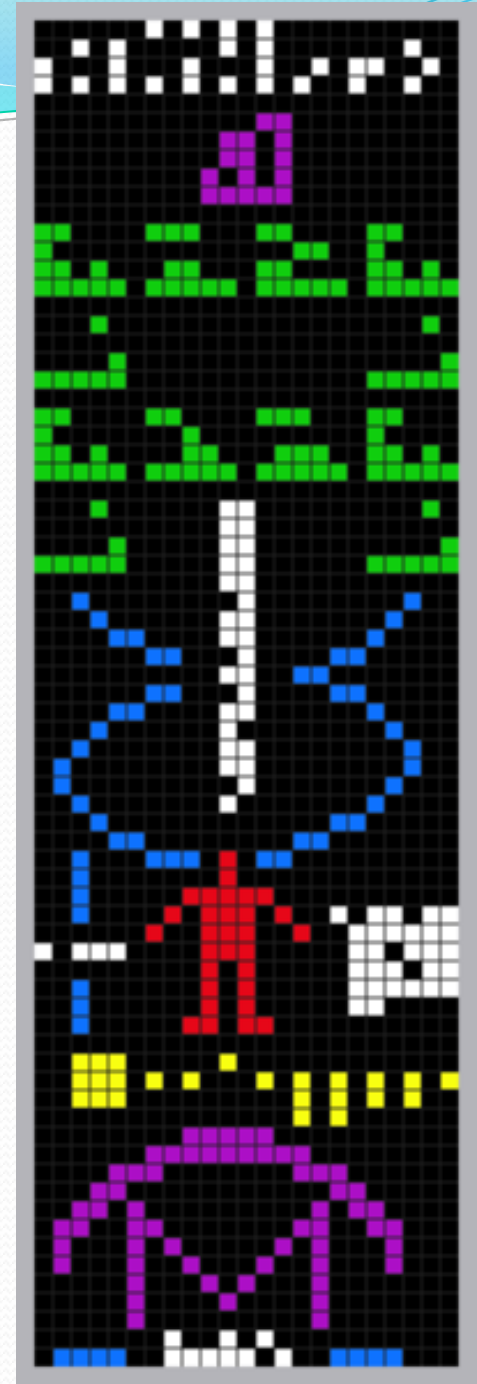
「出合い」という特異点

- 出合いには「昨日またかくてありけり」が存在しない
- 相互行為の中の特異点: 滑らかに接続できない, 尖った点

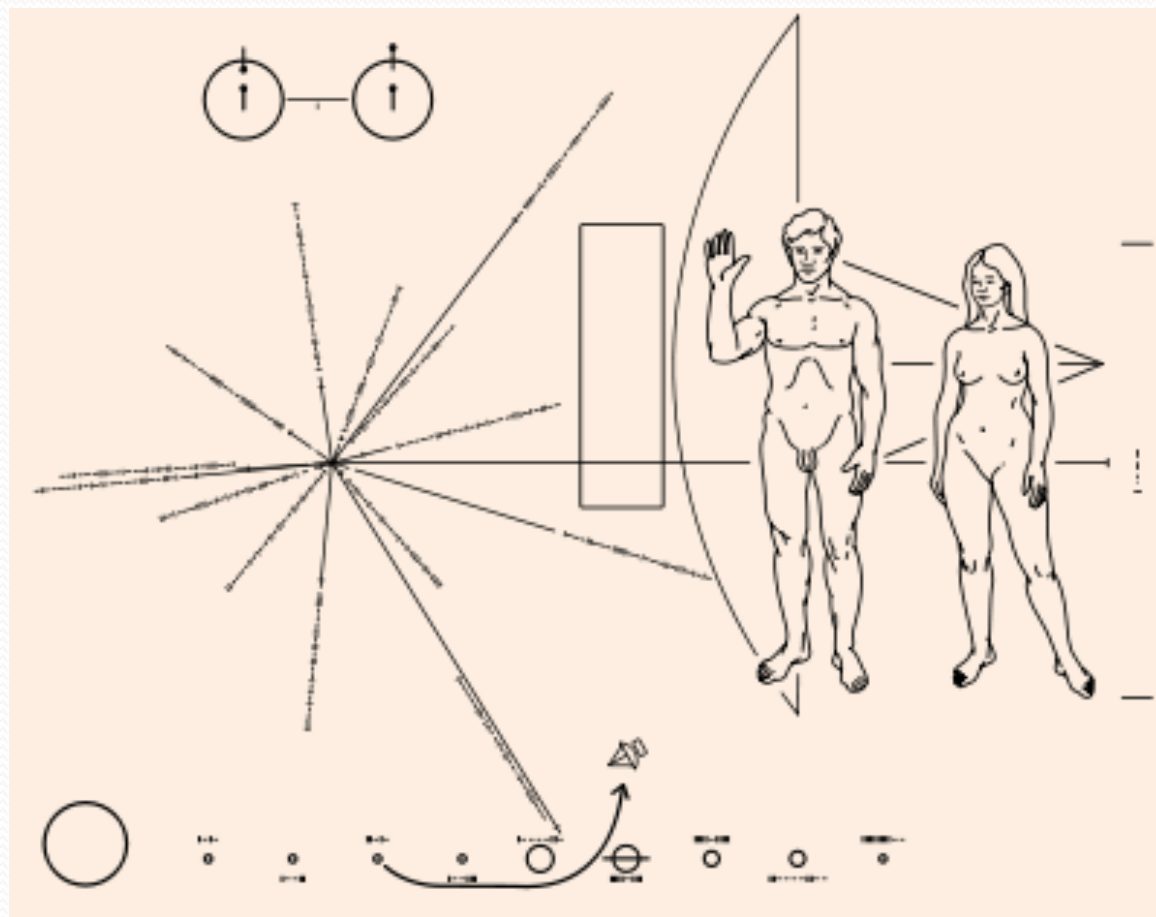
→ 特異点を消す方法は?

数学を手がかりにした理解

- アレシボ・メッセージ



パイオニア・メッセージ



21cm波による通信

- 波長21cmの電波が星間通信に一番都合がよいと考えられている
- 物理的合理性を考えると、われわれもそこを狙おうとするし、また異星人もそこを狙ってくるだろう、と想定される
- SETI (Search for Extra-Terrestrial Intelligence)

理解不能な宇宙人

- 山田正紀: SFの可能性は「想像できないことを想像する」ことである
- 「ソラリスの海」や「ワースト・コンタクト」のケララ: 何かを伝えようとする意図があり, こちらががんばればわかりあえるのだ, という確信そのものが揺らいでくる

彼ら同士の理解？

- 彼ら同士は理解し合っているが、われわれは入り込めない
- 理解の基盤: 身体的相同性？
- 身体が違えば理解が違うのか？ ヒューマノイド型/
非ヒューマノイド型

インタラク션을(参照点なしに) 構造化する

- 「コンタクト」に描かれた第二の方法: 地球から送られてきた画像(ヒットラーの演説)を, そっくりそのまま返送する

挨拶

- 人間のみならず，動物にも見られる
- 見たら「これは挨拶だな」と「わかる」
- 意味を伝えるのではない。ある意味で空疎（ファティック・コミュニオン）
- およそどんな行動であろうと，挨拶になりうる
- 行動そのものよりも，相互行為の規則性を作り出すことの方が重要

宇宙人との出会いによる文化変容？

- もしSETIに成功した場合、人類の意識というものがどう変わるか？
- cf. クラーク「楽園の泉」
スターグライダーというロボット宇宙船が太陽系をスイングバイしたとき、「宗教に意味はない」ということを言って、地球上の宗教はすべて崩壊した、というエピソード

わからなさの水準:「バーサーカー」はわからないか？

- バーサーカーは果たして不可知か？
- 「連中は人類を皆殺しにしようとしているのだ」ということがわかる, という意味において, バーサーカーは非常に「わかりやすい」相手なのではないか

「トムとジェリーのパラドックス」

- 「仲良く喧嘩する」ことができるのはなぜか？

クワインの「根源的翻訳」

- ギャバガイ問題: 原住民が走りすぎるうさぎを見て「ギャバガイ!」と叫んだとき、この発話は、通常「うさぎだ!」と訳していいように思われるが、それを一意的に確定することはできない

デイヴィッドソン「寛容の原理」

- (一意的に確定することはできないが)聞き手は話し手が「何か意味のあることを言おうとしている」ということを信頼し、思いやり(charity)の精神を持って解釈しようと努力する

コミュニケーションにおける「信頼」?

- グライスの公準における「関連性の原則」: 「関係のあることを言え」
- スペルベル&ウィルソンの関連性理論
- 異質な感じ: 具体的にコミュニケーションをおこなうための方策について語っているのではなく、それをおこなうにあたっての態度あるいは身構えという、一段メタなレベルの事柄について語っている
- 何かをさせるのに「○○しろ」という指示を出すのではなく「(何にせよ)がんばってやれ! 」と言っているのと同じ

異星人との信頼，愛？

- 異星人にも「信頼」は存在するか？これが一番大きな問題。
- 日本のSFにおける「愛」とか「友情」の問題
- 宇宙の生命が，自己複製に由来する他者への信頼という身構えを具えているならば，おそらくファースト・コンタクトはスムーズに行くのではないか